

大阪府感染症情報センターでは国立感染症研究所が配信している梅毒の国内発生状況分析情報(<https://www.niid.go.jp/niid/ja/syphilis-m-3/syphilis-idwrs/7816-syphilis-data.html>)を参考に、大阪府内における梅毒症例の動向について四半期毎の推移をまとめたものを 2022 年第 1 四半期より四半期毎に配信させていただいております

大阪府内で感染症発生動向調査によって届け出られた梅毒の概要

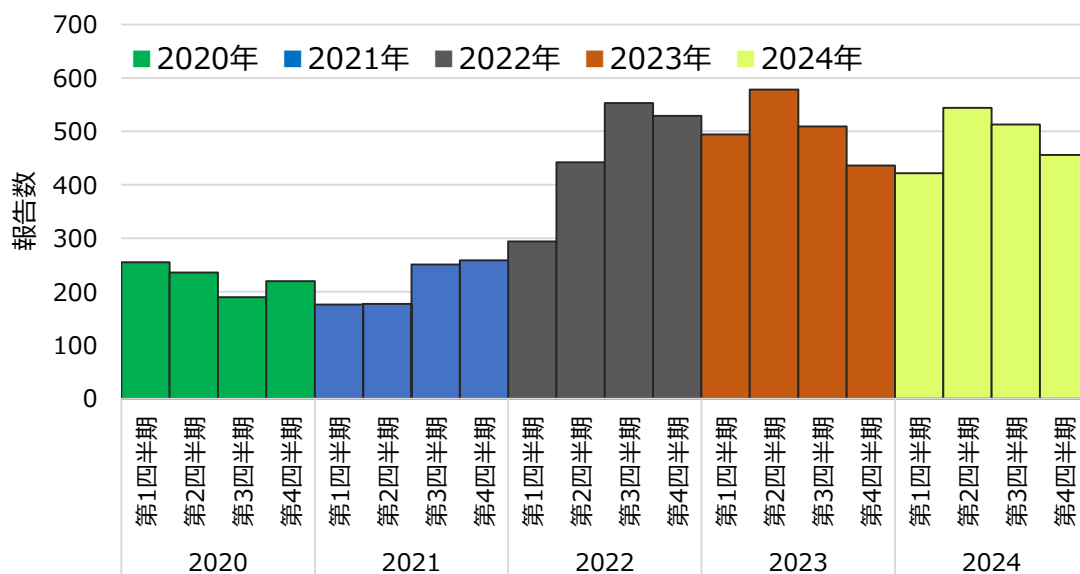
2025 年 1 月 17 日現在

2023 年第 4 四半期から 2024 年第 4 四半期は、以下の週に該当する

- ・ 2023 年第 4 四半期：第 40 週～52 週（2023 年 10 月 2 日～2023 年 12 月 31 日）
- ・ 2024 年第 1 四半期：第 1 週～13 週（2024 年 1 月 1 日～2024 年 3 月 31 日）
- ・ 2024 年第 2 四半期：第 14 週～26 週（2024 年 4 月 1 日～2024 年 6 月 30 日）
- ・ 2024 年第 3 四半期：第 27 週～39 週（2024 年 7 月 1 日～2024 年 9 月 29 日）
- ・ 2024 年第 4 四半期：第 40 週～52 週（2024 年 9 月 30 日～2024 年 12 月 29 日）

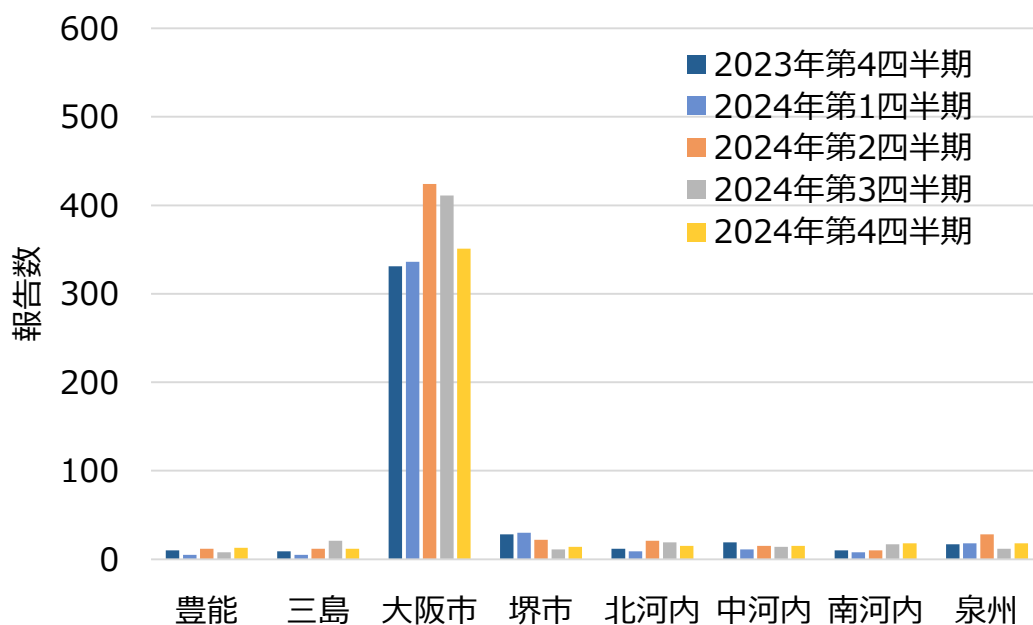
注）2024 年第 52 週(2024 年 12 月 29 日)までに診断されていても 2025 年 1 月 17 日以降に届け出のあった報告は含まない。

図 1 大阪府内における梅毒報告数



- 2024 年第 4 四半期は報告数が第 3 四半期から減少した。現時点で 2024 年第 4 四半期は 456 例で、2024 年第 3 四半期と比較して報告数が 11%減少した。昨年の同一四半期の報告数からは 5%増加している。（遅れて報告される場合があることから、特に直近の報告数は今後変動する可能性がある。）

図2 ブロック別報告数



- 四半期毎の報告数は全ての期間において大阪市医療圏で最も多い。2024年第3四半期と比較し2024年第4四半期は三島医療圏、大阪市医療圏、北河内医療圏を除く5ブロックで報告数が増加した。

【参考】感染症発生動向調査ブロック分け (<http://www.iph.pref.osaka.jp/infection/block1.html>)

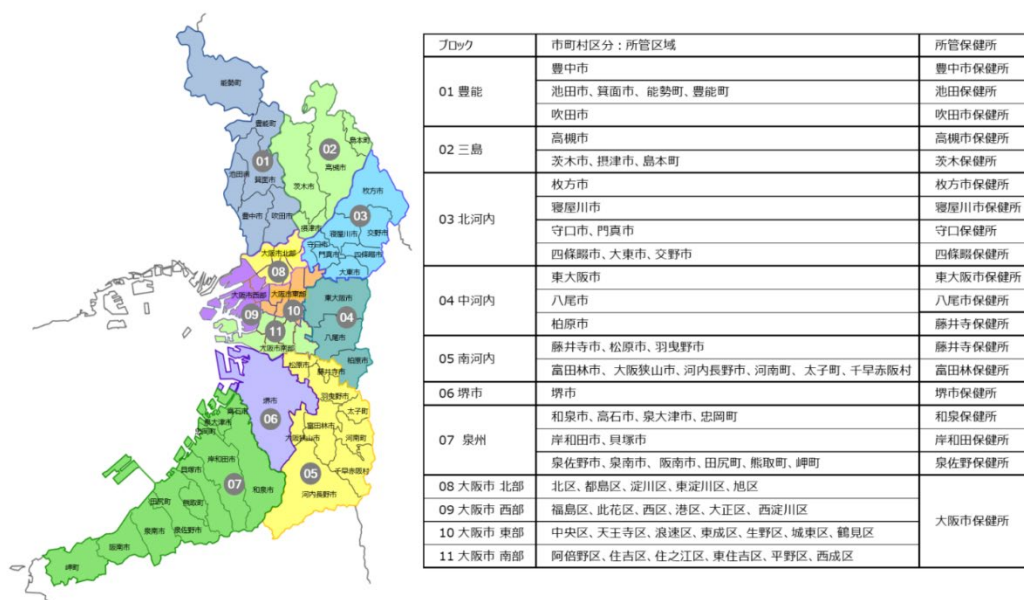
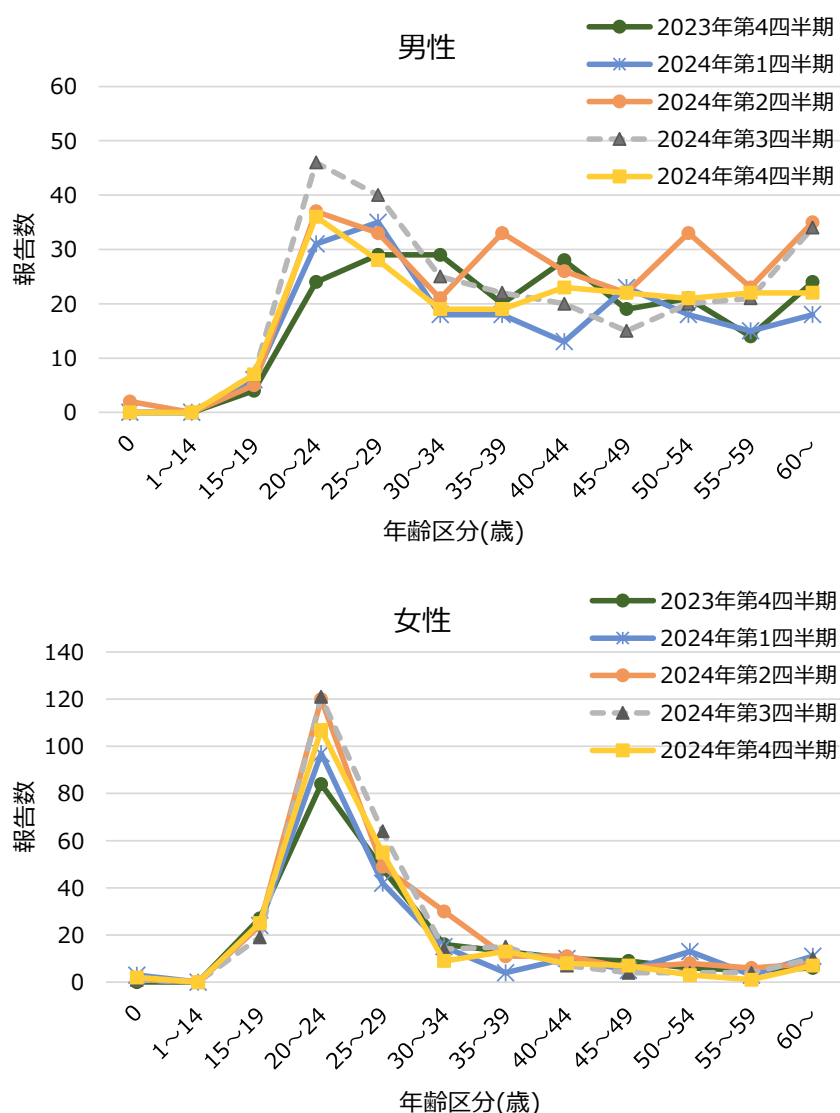
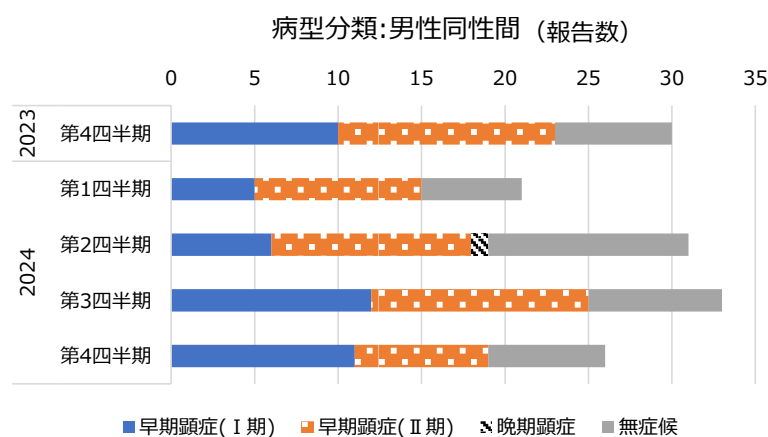
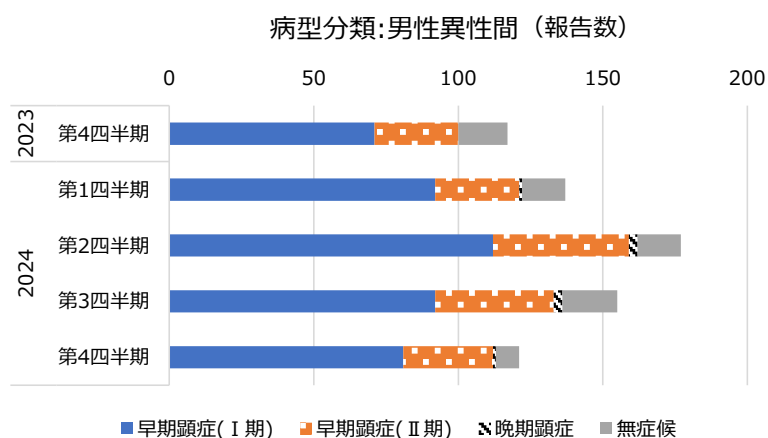
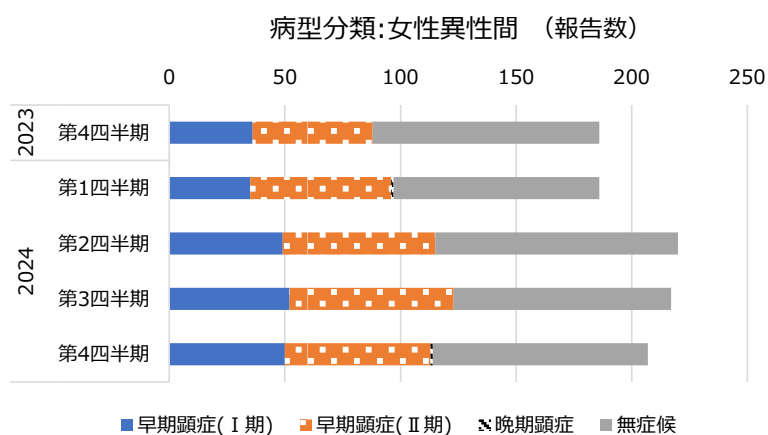


図3 性別年齢分布



- 2024 年第 4 四半期の男性の報告数は 219 例で、第 3 四半期と比較し 12%減少した。最も報告数の多い年齢区分は引き続き 20～24 歳で、次いで 25～29 歳が多かった。20 歳代の割合は男性全体の 29%を占めた。流行開始当初は、男性は 20 歳代から 50 歳代まで、同程度の割合で報告されていたが、20 歳代の割合が他の年齢層と比較して多く報告されるようになってきている。(図 8 参照)
- 2024 年第 4 四半期の女性の報告数は 237 例で第 3 四半期に比較し 10%減少した。引き続き 20～24 歳で報告数が最も多く、次いで 25～29 歳が多かった。20 歳代の割合は女性全体の 68%を占めた。また 10 歳代後半の割合は女性全体の 11%を占めている。
- 全期間を通じ 20～40 歳代の男性および 20 歳代の女性で特に報告数が多いことから、後述する先天梅毒の発生を防ぐ観点から、妊娠の可能性のある者のうち感染リスクがある者や、妊娠中、または、妊娠の可能性のある者のパートナーに対する、必要に応じた積極的な検査実施と啓発が重要であると考えられた。
- 男女ともに 20 歳代の報告数が多いことから、10 歳代の若者が性感染症に関する知識を得る予防啓発の機会を増やすことが、重要な対策の一つになると考えられた。

図4 性的接触歴別、病型の内訳

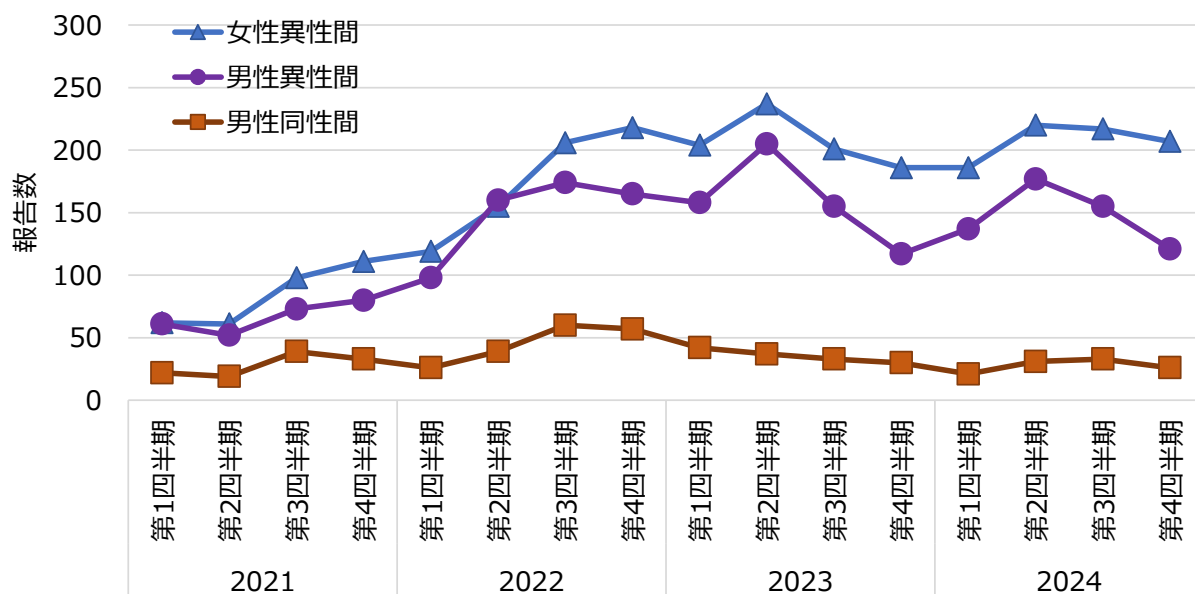


- 2024年第4四半期は無症候での届出の占める割合が女性異性間で45%（93例）、男性異性間で7%（8例）、男性同性間で27%（7例）と、2024年第3四半期と比較し、それぞれ2%増加、5%減少、3%増加した。
- 2024年第4四半期は早期顕症(I期)の届出の占める割合が女性異性間で24%（50例）、男性異性間で67%（81例）、男性同性間で42%（11例）であった。

- 2024年第4四半期は早期顕症(Ⅱ期)の届出の占める割合が女性異性間で30%(63例)、男性異性間で26%(31例)、男性同性間で31%(8例)であった。
- 全期間を通じて女性異性間は無症候での届出の割合が高く、一方で男性異性間は無症候での届出の割合が低い(2021年以降の届出に占める無症候の割合；女性異性間47%、男性異性間11%)。女性は自発的検査あるいは医師の検査勧奨や妊婦健診など、検診目的の検査で感染が判明している可能性が考えられ、男性は、梅毒の症状を自認した患者の受診によつての診断が大部分を占め、自発的な検診による無症候性梅毒の検出・診断が少なくなっているものと考えられた。
- 男性同性間とは男性異性間と比較し無症候で届出される割合が高いことから(2021年以降の届出に占める無症候の割合：男性同性間32%)、受検意識の高さや検診目的の検査による判明が多い可能性がある。
- 梅毒の流行を抑えるには、予防啓発はもちろんのことだが、それに加えて自発的な梅毒検査受検率のさらなる向上が必要である。特に感染の可能性の高い、異性間性的接触機会が多い者に対し、働きながらでも受検しやすい梅毒検査環境を提供するなど、積極的な受検を促し、無症候の感染者の診断と治療による介入を行うことが重要であると考えられた。

注) 男性同性間・異性間両方に記載のある症例は重複して含めている

図5 性的接触歴別報告数推移



- 2024年第4四半期と2024年第3四半期を比較すると、女性の異性間性的接触歴のある報告数は5%減少、男性の異性間性的接触歴のある報告数は22%減少、同性間性的接触歴のある報告例は21%減少した。2023年第4四半期と比較すると、女性の異性間性的接触歴のある報告数は11%増加、男性の異性間性的接触歴のある報告数は3%増加、同性間性的接触歴のある報告例は13%減少した。

注) 男性同性間・異性間両方に記載のある症例は重複して含めている

表1 直近6か月以内の性別性風俗産業の従事歴および利用歴

男性		2023年第4四半期		2024年第1四半期		2024年第2四半期		2024年第3四半期		2024年第4四半期	
従事歴	あり	8	4%	8	4%	9	3%	11	4%	14	6%
	なし	111	52%	119	61%	164	61%	141	56%	124	57%
	不明	71	33%	44	23%	63	23%	71	28%	52	24%
	空欄	22	10%	24	12%	34	13%	27	11%	29	13%
	計	212		195		270		250		219	
男性		2023年第4四半期		2024年第1四半期		2024年第2四半期		2024年第3四半期		2024年第4四半期	
利用歴	あり	63	30%	80	41%	94	35%	93	37%	65	30%
	なし	52	25%	52	27%	78	29%	62	25%	57	26%
	不明	74	35%	40	21%	64	24%	69	28%	69	32%
	空欄	23	11%	23	12%	34	13%	26	10%	28	13%
	計	212		195		270		250		219	

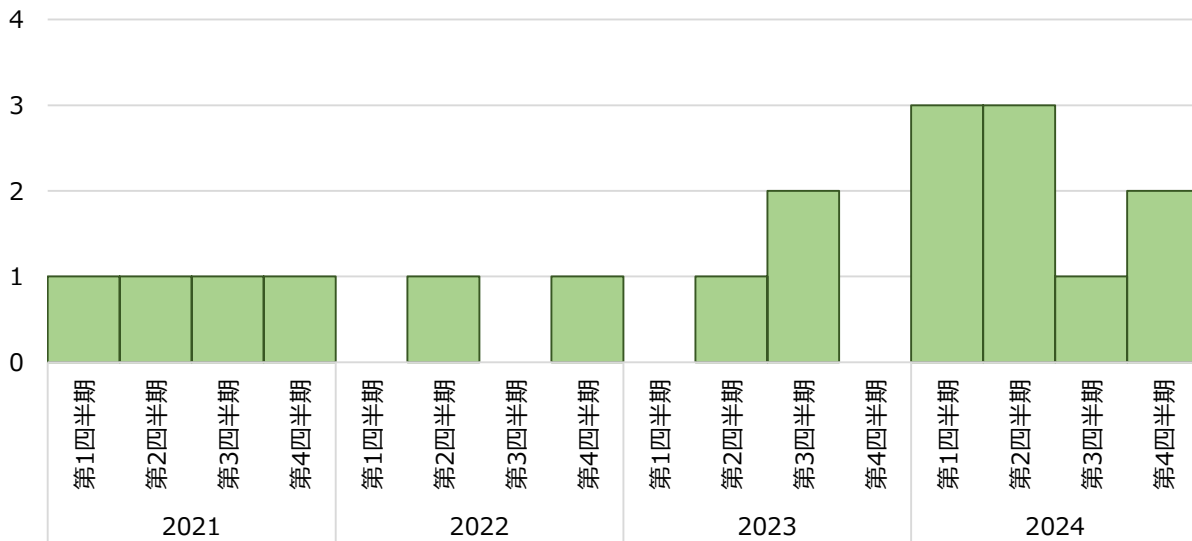
女性		2023年第4四半期		2024年第1四半期		2024年第2四半期		2024年第3四半期		2024年第4四半期	
従事歴	あり	114	51%	118	52%	115	42%	133	51%	128	54%
	なし	46	21%	46	20%	61	22%	53	20%	48	20%
	不明	53	24%	46	20%	74	27%	60	23%	46	19%
	空欄	11	5%	17	7%	24	9%	17	6%	15	6%
	計	224		227		274		263		237	
女性		2023年第4四半期		2024年第1四半期		2024年第2四半期		2024年第3四半期		2024年第4四半期	
利用歴	あり	4	2%	1	0%	3	1%	3	1%	4	2%
	なし	70	31%	101	44%	94	34%	115	44%	99	42%
	不明	135	60%	106	47%	147	54%	124	47%	117	49%
	空欄	15	7%	19	8%	30	11%	21	8%	17	7%
	計	224		227		274		263		237	

* 空欄：あり、なし、不明いずれにも記載がない場合

割合(%)は小数点第一位を四捨五入して記載

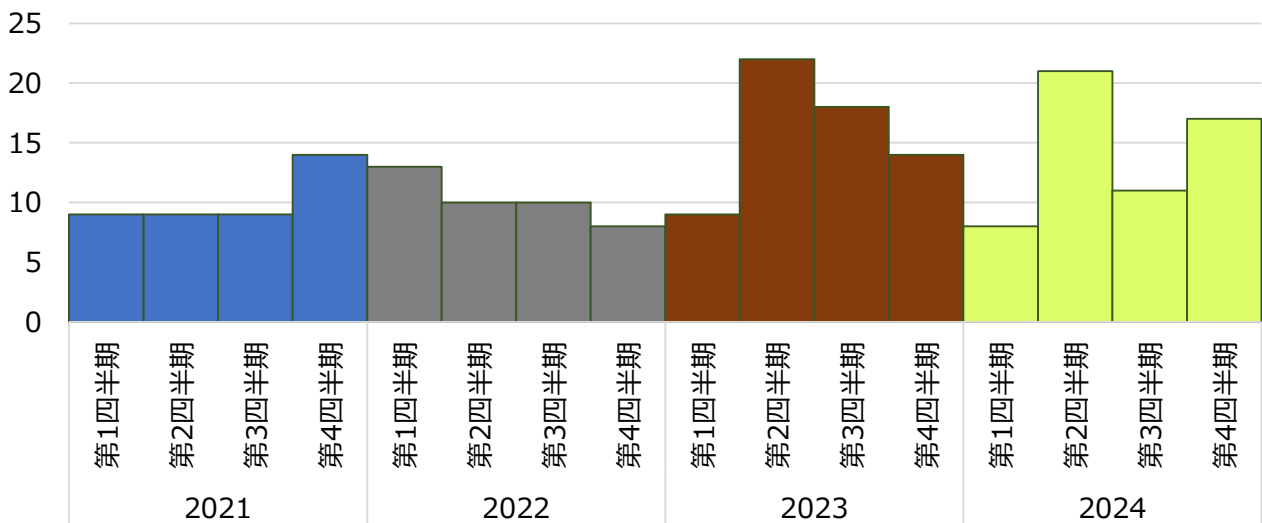
- 男性のうち性風俗産業利用歴のある報告例は2023年第4四半期以降30%～41%で推移している。
- 女性のうち性風俗産業従事歴のある報告例は2023年第4四半期以降42～54%で推移している。
- 男性のうち性風俗産業利用歴が不明の報告例が20～30%台、女性のうち性風俗産業従事歴が不明の報告例が10～20%台で推移している。梅毒に対し有効な対策を講ずるうえで、精度の高い疫学情報が不可欠であり、届出時の不明記載の割合を少しでも下げていくことが重要であると考え。

図6 先天梅毒の報告状況



- 2024年第4四半期に病型が先天梅毒として報告された届出例は2例で、2023年の先天梅毒届出の累計3例を超え、2024年の累計は9例と過去最多の報告数となった。

図7 妊娠例の報告状況



- 2024年第4四半期に報告された梅毒届出例のうち、妊娠例は17例であり、2024年の累計は57例となった。

参考

大阪府感染症情報センター

大阪府内で報告された梅毒届出症例における妊娠例と先天梅毒の報告状況

<http://www.iph.pref.osaka.jp/zensu/20220623152435.html>